

塾での生活

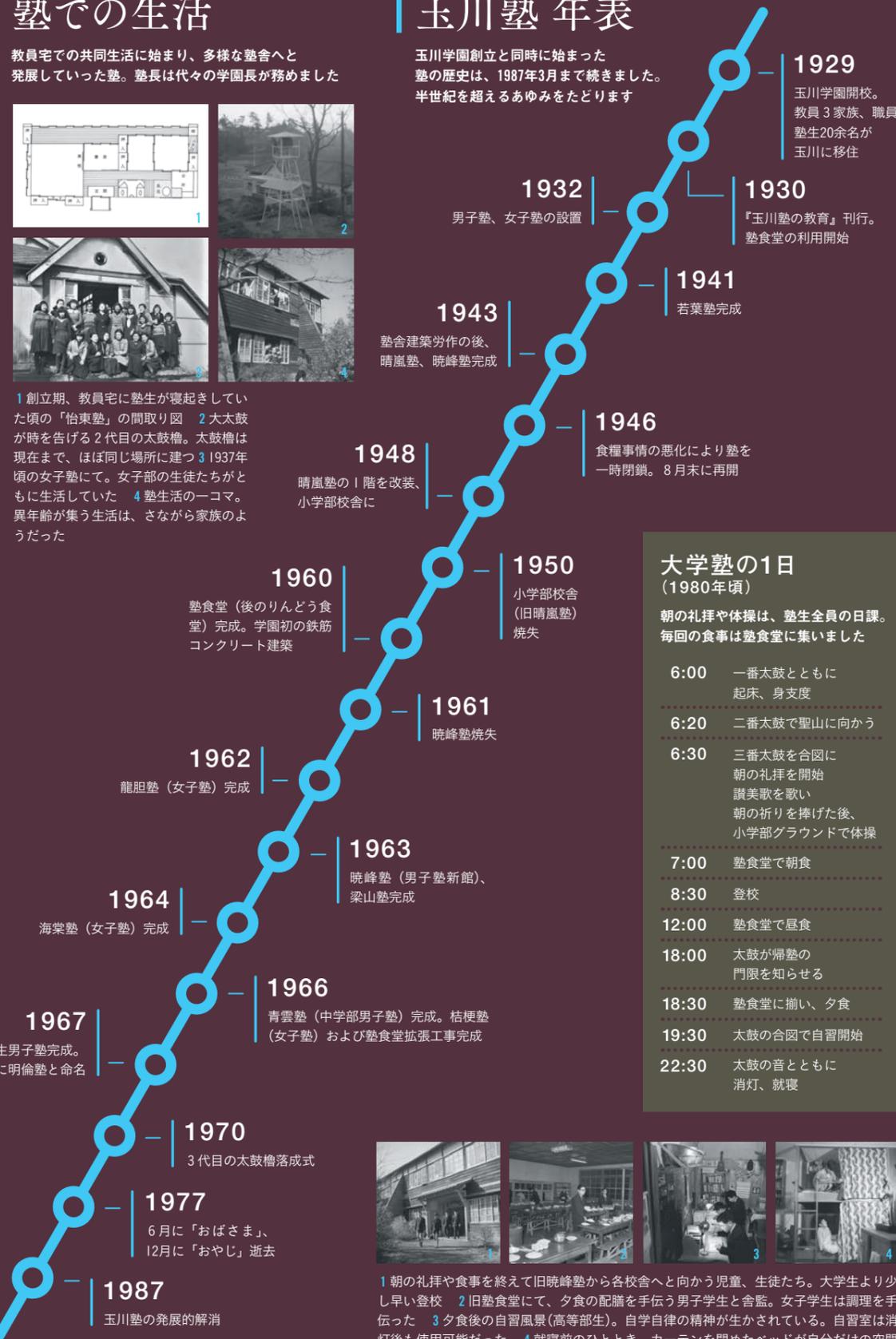
教員宅での共同生活に始まり、多様な塾舎へと発展していった塾。塾長は代々の学園長が務めました



1 創立期、教員宅に塾生が寝起きしていた頃の「怡東塾」の間取り図 2 大太鼓が時を告げる2代目の太鼓櫓。太鼓櫓は現在まで、ほぼ同じ場所に建つ 3 1937年頃の女子塾にて。女子部の生徒たちがともに生活していた 4 塾生活の一コマ。異年齢が集う生活は、さながら家族のようだった

玉川塾 年表

玉川学園創立と同時に始まった塾の歴史は、1987年3月まで続きました。半世紀を超えるあゆみをたどります



大学塾の1日 (1980年頃)

朝の礼拝や体操は、塾生全員の日課。毎回の食事は塾食堂に集いました

6:00	一番太鼓とともに起床、身支度
6:20	二番太鼓で聖山に向かう
6:30	三番太鼓を合図に朝の礼拝を開始 讃美歌を歌い朝の祈りを捧げた後、小学部グラウンドで体操
7:00	塾食堂で朝食
8:30	登校
12:00	塾食堂で昼食
18:00	太鼓が帰塾の門限を知らせる
18:30	塾食堂に揃い、夕食
19:30	太鼓の合図で自習開始
22:30	太鼓の音とともに消灯、就寝



1 朝の礼拝や食事を終えて旧晚峰塾から各校舎へと向かう児童、生徒たち。大学生より少し早い登校 2 旧塾食堂にて、夕食の配膳を手伝う男子学生と舎監。女子学生は調理を手伝った 3 夕食後の自習風景(高等部生)。自学自律の精神が生かされている。自習室は消灯後も使用可能だった 4 就寝前のひととき。カーテンを閉めたベッドが自分だけの空間

研究エッセイ

RESEARCH ESSAY

玉川塾の教育

創立者小原國芳が掲げた教育理念のひとつに、「塾教育」がありました。

約60年のあいだ玉川で実践された塾教育を、塾生として、また舎監として体験した筆者が振り返ります。

山岡好夫

Yoshio Yamaoka

農学部生産農学科教授

教

員と児童生徒がともに生活しながら学んだ玉川学園の塾教育は、全人教育の礎となるものでした。1929(昭和4)年の開校に合わせて教員3家族と職員、塾生20余名が玉川に移住したことが、玉川の塾の原点です。当時は教員の家族の一員として家事も分担した2、3名の「学僕」、7、8名で教員宅に寄宿する「塾生」、独立して自治生活する「寮生」があり、これらを総じて「塾生」と呼んでいました。

24時間の教育の場

私が1976年早春に愛媛の実家で玉川大学の合格通知を受け取ったとき、「入塾願」も一緒に届きました。入塾願には玉川大学の志望理由などを父母が記述する欄があり、私の父は『児童百科大辞典』のこのことを書いたと聞いています。そのころ、塾では中学生から大学生までが生活していました。私は玉川大学の4年間を塾生として、また本学奉職後の3年間を舎監として大学塾で過ごし、多くを学びました。

創立者が目指したのは、吉田松陰の松下村塾や広瀬淡窓の咸宜園のような、教育と生活の共存です。だからこそ「寮」ではなく「塾」であり、「24時間の教育」「師弟同行」「知行合一」の場でした。生徒数の増加に伴い、1932年からは男子塾、女子塾での共同生活が始まりました。以降、玉川の発展とともに、小原國芳先生の自宅がある聖山のふもとに塾舎が建ち並び、「玉川塾」と呼ばれるようになります。交通機関の発達により自宅から通学可能な生徒も増え、塾生は親元を離れて生活する者が増えていきました。

塾の最小単位は個々の「塾生」です。共同生活の中で、どのように自学自律を進めるかが目標です。続く単位は「部屋」で、上級生の部屋長を中心に4人が生活をともします。「今日も、笑顔で挨拶しましたか」。入塾後は、この言

